



①岡村さんの体験を聞く子どもたち。手前にあるのは、岡村さんお手製の焼夷弾の模型。②当時のヘルメットは鉄製で、被るだけで頭が重く感じるそうです。③焼夷弾は、弾頭部分だけでも重く持ち上がりません。他にも、平和資料館・草の家(升形9-11)には、破裂した爆弾の一部や防空頭巾、食器などの戦時中の生活が感じられる資料を展示しています。

岡村さんが戦争体験を語り始めたのは、60歳で退職してからです。「とても悲しい体験で、思い出したくなかったが、いつかは伝えなければならぬ」と思っていた。空襲体験者が年々少なくなっている中で、県内外の学生をはじめ多くの人たちに、自身の体験と平和への思いを伝え続けています。「たった一晩で全てなくなった。戦争は元気な人が突然死んで、幸せからどん底になる。戦争はいかん。武力もいかん。今は、頑張っ

て性別も分からなくなってしまった人の遺体が次々と出てきた。すると、下の方から母と妹の遺体が出てきた。母は顔も分からないような状態だったが、着物が一部残っていて、その柄で母だと分かった。その胸には、まだ幼かった妹がしっかりと抱き締められていた。遺体は、軍の兵隊がトラックにボンボンと積んでいった。何もできず、ただ悲しい思いで見ている。母たちのことを思い出すと、今でも涙があふれて悲しくなる。ある日突然大切な人の命を奪った戦争は、78年経った今も、岡村さんの心を苦しめています。

伝えたい思い

岡村さんの話を聞いて感じたこと



第四小学校も今住んでいる場所も全部燃えたと聞いてびっくりした。もう戦争は起きてほしくない。岡村さんに「仲良くして戦争が起らないようにしてね」と言われたので、平和を守る大人になりたいと思う。

亡くなった人をトラックに乗せ、グラウンドに並べた話が怖くて衝撃的だった。毎日のように爆弾が落とされ、火事でいろんな人が亡くなっていったのが悲しい。これからずっと平和な国でいてほしいと思う。



高知でも戦争が起こっていたことを知って、とても怖かった。大切な家族や友達が死んでしまうかもしれない戦争は、絶対にしてはいけないと思った。

見せてもらった模型の爆弾が大きくて、これが落ちてくると考えたら怖いと思った。また戦争が起きたら悲しい。

高知空襲展 を開催します

空襲の記憶を忘れず、このような悲しい出来事が二度と起らないことを願って、空襲後の高知市内の様子を記録した写真を展示します。ぜひご覧ください。



▲空襲後の市内中心部

- ▶市役所本庁舎 1階 (本町 5-1-45)  
6月26日(月)～7月7日(金)  
8時半～17時15分 (土・日曜日は閉庁)
- ▶オーテピア高知図書館 2階 (追手筋 2-1-1)  
7月20日(木)～8月2日(水)  
9時～20時 (日曜日は18時、最終日は16時まで)  
※7月21日(金)および月曜日は休館

良くしていったほしい。岡村さんの言葉には、平和への思いが強くなってきました。

平和であることは、決して当たり前のことではありません。過去に多くの犠牲があったことを忘れることなく、平和な時代がいつまでも続くように、平和の尊さや命の重さについて、一人一人がしっかりと考えなければなりません。それが、平和のバトンを託された私たちが、次の世代のためにできることではないでしょうか。



第二次世界大戦の終戦から今年で78年を迎えます。日々の平和な暮らしの中で、戦争はどこか遠い国の出来事のように感じている方も少なくないかもしれません。高知市にも残る戦争の記憶を通じて、改めて戦争の悲惨さ、平和の大切さや命の尊さについて考えてみませんか。

▲高知大空襲後のはりまや橋交差点付近の様子。写真左側の建物は、正面の外壁を除く大部分が空襲により焼け落ちています。



▲現在のはりまや橋交差点

高知大空襲とは

昭和20年7月4日未明、アメリカ軍のB29爆撃機が高知市の上空から多数の焼夷弾を投下しました。爆撃を受けて、街は一瞬のうちに火の海となり、翌朝には辺り一面が焼け野原となりました。それまでも複数回の空襲を受けていましたが、この日の空襲は最も大規模であり、400人以上の尊い命が失われました。

あの日、高知で起こったこと

今でも防空壕の光景を思い出すと言葉が出なくなる。そう話してくれたのは、岡村正弘さん(86)。今の堺町に家族6人で暮らしていた岡村さんは、当時8歳で、学校へ通っていました。あの日、家で寝ていると、空襲を知らせる声で起こされました。「窓の外が昼間のような明るさ

で、ただごとではないと分かった。母と妹と一緒に、町内の共同地下防空壕へ急いで避難した。しかし、防空壕は避難してきた人であふれ返り、息苦しさに耐え切れなくなった岡村さんは、止める母の手を振り切って外へ飛び出しました。

「目の前を火の付いた男の人が走ってきて川に飛び込んだ。その人は、頭も顔も焼け焦げていたが、体格から、母と妹が避難していた防空壕にいた人だったことが分かった。川から助けたが、間もなく亡くなってしまった」。岡村さんは、無事に父や兄と合流することができたものの、離れてしまった母と妹のことが心配でたまりませんでした。翌朝、燃え尽きた街の地面がまだ熱いうちから防空壕へ向かうと、入り口はつぶれてしまっていました。「誰かが掘り返すと、焼け焦げ



体験を話してくれた岡村 正弘さん

この記事についての問い合わせは総務課 ☎823-9955